主題

古いものや些細なものが捨てられ、すべてのものが進歩し、新しくなることが人間にとって常に良いこととは限らない。失ってからはじめて気づくようなものの中にこそ、かけがえのない、自分自身を確認する契機がある。

「青が消える」は虚構の要素の強い作品ではあるが、「僕」の心情と行為を丹念に追跡していくと、読者自身にとっての「青」は何かという問いが立ち現れてくる。

時代が変わることで失われていくものが自分にとってかけがえのないものであったとき、あるいは、目の前にある現実や社会というものが制度として立ち塞がったとき、「個」としてのあり方や「生」の実相というものが立ち現れてくるといえよう。

構成

P二四一・11から最後までを独立させて五段落構成としてもよいだろう。

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P二三六・15〈そして青が消えたのだ。〉	１９９９年の大晦日の夜、アイロンをかけているときに、青が消えた。最初は自分の目のせいかと思ったが、何度見直しても青は存在しなかった。青色だった衣類はすべて白に変わっていた。ガールフレンドとのハワイ旅行の写真の青い海も、シベリアの氷原のような白い広野に変わっていた。世界中の人間がミレニアムを祝うパーティーにでかけていたが、「僕」はガールフレンドと喧嘩別れして、ものすごく落ち込んでいたところだった。
第二段	P二三六・16〈僕は青の消滅について何か情報が〉～P二三八・7〈そして彼女は電話を切った。〉	「僕」は青の消滅について情報を得るために、何人かの友人に電話をかけるが、誰もつかまらない。最後に、別れたガールフレンドに電話をかけるが、相手は賑やかなパーティーの最中だった。「僕」は電話に出てきた彼女に青のことを尋ねるが、青のことなどどうでもよいし、そんなことで他人の楽しみに水をさすなとまで言われ、実に冷たい対応をされる。
第三段	P二三八・8〈僕はコートを着込み、外に出てみた〉～P二四〇・3〈よくないことが起こるんじゃないかという気がしたのだ。〉	電話で情報が得られなかった「僕」は、外へ出て自分の目で確認しようと行動を起こす。ブルーを基調色としていた地下鉄も、すべて白に変わっていた。駅員に尋ねても、駅員は青を「政治のこと」と言うなど、要領を得ない。「僕」は別の青を探そうと、青が印象的ないくつかのものを想起するが、どこにも見いだせないままでいる。そして、このまま新しいミレニアムに入ってしまったらよくないことが起こるのではないかという気になり、不安が募ってくる。
第四段	P二四〇・4〈僕はクレジット・カードを使って〉～終わり	「僕」は電話でコンピューター・システムの総理大臣に青の消滅を訴えるが、総理大臣は、青は美しい色だが、形のあるものは必ずなくなるのが歴史であり、なくなったらまた新しいものを作るのが経済である、と答える。「僕」がわけのわからないまま通りを歩いていると、時計が十二時を打ち、みんなが一斉に歓声をあげ、ミレニアムを迎えた。誰も消えた青のことなど気にしていなかったが、「僕」だけは、好きな色だった青が消えたことの喪失感を覚えていた。